

# 心理学系大学新生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因

目白大学人間社会学部心理カウンセリング学科 庄司正実

## 【要約】

本研究の目的は、心理学系大学新生における適応感および満足感の関連要因を検討することである。そのためにまず適応感と満足感の測度の検討を行った。次に適応感および満足感に関連する要因を検討した。調査参加者は、大学の1年生から4年生までの327人(男性100人, 女性227人)である。因子分析では適応感項目と満足感項目は分離できず、階層的重回帰分析においても全体的適応感および全体的満足感の境界は曖昧であった。パーソナリティを統制した上でも重回帰分析は入学関連変数・適応感項目・満足感項目が有意に全体的適応感および全体的満足感を説明した。適応感や満足感に関連する重要な要因は授業内容・大学環境・友人関係であった。新生は上級生よりも多くの適応感や満足感項目で高得点を示し、大学への期待感による可能性が考えられた。新生の入学不本意感は入学2ヶ月ほどでかなり改善されていた。大学生生活適応研究における測度の問題, 縦断的研究の必要性, 関連要因の探索などの必要性が検討された。

キーワード：大学新生, 適応感, 満足感, 不本意入学

## 問題と目的

大学生生活において不適応を感じる学生は多い。本研究の目的は心理学系大学新生の入学直後の適応状況およびその関連要因を検討することである。

大学進学率は50%を超え、かつてのように裕福な家庭の子弟あるいは成績優秀者が大学進学するという状況ではなくなっている。その結果、多様な一般的な学生が入学するようになり不適応を起こす学生もまた多くなっている(谷島, 2005)。特に入学直後は不適応を生じやすく、新生の大学への適応を把握しておくことは学生支援上重要な課題である。

我が国において大学生の適応研究は多く行われてきた(吉田・橋本・安藤・植村, 1999)。たとえば、無気力学生(笠原・山田, 1981)、大学生生活不安(藤井, 1988)、新生の孤独感(諸井, 1986)などの研究が以前よりなされた。ま

た大学生の不適応について1970年代はじめ安藤(1971)がそれまでの研究を展望し学業と心理・精神の両面からまとめている。近年では広沢(2007)が学習と対人関係の2側面より大学新生の適応を検討している。しかし全体的に見ると不適応研究は中学生や高校生を対象としたものが多く、特に最近は大学生を対象とした不適応研究はあまり多くない。

大学入学後の不適応には入学関連要因が影響している。そのような入学関連要因のひとつに不本意入学がある。意にそぐわない大学に入学したという不本意入学は不適応感に結びつきやすいが(山田, 2006)、不本意感は大学によりかなり異なる(ベネッセ, 2009)。伊藤(1995)は、大学新入を対象に不本意入学の検討し、第1志望大学に入学できず不本意入学をしたものの現在の大学生生活に満足している学生は充実感が高く、第1志望に入学したが入学後の大学生

活に不満を感じている学生は充実感が低かったとしている。この研究は不本意入学であっても入学後の学生生活に満足感が得られれば健康的で好ましい学生生活を送れることを示唆している。このような調査が見られるが不本意入学が適応感や満足感にどの程度影響するのか実証的研究は少ない。

その他の入学関連要因として、推薦入学やAO入学など入学形態の多様化の影響が考えられる。しかし、大学全入時代を迎え大学進学率の増加とそれに伴う入試形態変化が学生の学力低下にしているという指摘はあるが(海老原, 2009), 入試形態と適応問題についての実証的研究はほとんど行われていない。

本研究ではこれら不本意入学や入学形態など入学関連要因が新入生の適応状況に影響するかどうかを検討する。

### 適応測定の問題点

大学生の適応や健康度の研究は多く行われてきたが、大学生生活の好ましさを測定するためにどのような指標が最も適当であるかはよく分かっていない。主観的適応感を用いる研究が多いが、大学生生活の満足感を目的変数とする研究も多い。充実感が重要とする研究もある。また、そのほか大学生生活での達成感や心身健康感などの主観的変数や学業成績や退学率など客観的変数も測定指標として考えられる。これらいろいろな指標が調査目的により選択されるわけであるが、その相互関係や優劣などは十分検討されているわけではない。

適応感によく用いられる測度であるが、岡田(2005)はこれまでの適応研究を展望して適応感と満足感の混同を問題点のひとつとしてあげている。これまでの適応感尺度の尺度項目をみると「大学生生活の～に満足している」などが含まれていることがある。このような項目は適応感を測っているのか満足感を測っているのか区別がつかない。逆に満足感尺度の中に「～にうまくやっている」等の項目があり、これは満足感の一部が適応を測っていることになる。以上のように適応感と満足感には測定上の混乱が認められる。

また適応感尺度の中には、学生としての適応

状態全体を測定すべきだとして「私は家族とよく話をする」「私はクヨクヨしてしまう」などの項目を含んでいるものもある。このように多くの場面を含めるとパーソナリティ尺度や症状尺度などとも識別が困難になる。大学生の適応感を居場所感としてとらえようとする尺度(大久保・青柳, 2003)もあるが、居場所感概念についても多くの研究あり(石本, 2009), 適応感と居場所感の概念的相違は検討されていない。

このような状況に対して岡田(2005)は自己の心理状態への評価は適応感ではなく満足感とすべきであるとしている。岡田(2008)は、学生適応の評価として学校生活を楽しく過ごせているというより主観的評価である享受とトラブルのない安定した学校生活を送れていることを表すより客観的な判断である順応の2側面を区別し、両者が因子的に分離していることを示している。

本研究では、適応感と満足感を適応指標として用いる。そして適応感を自分がその外的環境に適応しているかどうかの認知評価として定義する。したがって自分がリラックスできるとか居心地が良いと感じるなど自分自身の感情状態への評価は適応感に含めないこととする。これら感情は認知評価の結果であり、認知評価としての適応感には含めない。確かに適応がよければ必然的に良好な感情状態となるが、これはあくまでも適応感が良い結果として心理状態であり適応感そのものではないとする。そこで適応感の質問項目を「～と自分はどのくらい合っていると思うか」という形式で聞き単純に環境と自分が合っているかどうかの認知判断で適応感を測定する。

一方、満足感「～についてどのくらい満足しているか」という形式で質問し個人の心理状態としての感情を測定するものとする。適応できていると評価されれば感情としての満足感が高くなると推測されるのが、概念上は異なるものとする。

本研究では、順応と享受が分離されるようにこのように測定した適応感と満足感も分離できるか、また関連要因を調べ両者に違いがあるかどうか検討する。環境に適応できていれば満足感も高いと予想されるので分離は難しいが概念

的には異なるのである程度の相違がみられると考える。

### 本研究の目的

以上のとおり、従来より大学生の適応研究は多くなされてきているが、近年の大学進学状況にあわせた報告は少ない。とくに入学当初の適応問題は重要だと考えられる。そこで、本研究では入学初期の適応状況およびその関連要因を検討する。取り上げる要因は、本人のパーソナリティ、入学関連要因、入学後の大学生活に対する意識、の3つとする。入学関連要因については、不本意入学・入学形態（入試種別）・入学満足感・大学選択理由などである。また大学生の適応の指標として適応感および満足感を用いるが、両指標の関連についても検討しておく。

### 方法

#### 調査参加者

都内私立大学の心理系学科の学生が調査参加者である。授業時間を利用して一斉調査を行った。不適切な回答をした者は調査対象から除いた。新入生は男性35人（28.2%）、女性89人（71.8%）である。比較のため2年生男性39人（32.8%）、女性80人（67.2%）、3年生以上男性26人（31.0%）女性58人（69.0%）を調査参加者とし、全有効回答は男性100人（30.6%）女性227人（69.4%）の計327人であった。

#### 調査手続き

各学年とも授業時間内に質問用紙を配布し一斉調査を行った。新入は2010年5月上旬、2年生以上は6月下旬に実施した。2年生以上は無記名式調査であるが新入は縦断調査とするため学籍番号を記入してもらった。調査への参加は自由とした。

#### 調査項目

##### 入学関連項目

新入生調査では、入学形態、将来の希望進路、入学時点の満足度、入学が第一志望であったかどうか、他大学への再入学希望、大学志望動機、大学になれるまでの期間について尋ねた。2年生以上では大学志望動機、大学になれるまでの期間は尋ねていない。

入学形態は一般入試・センター利用入試群と

推薦入試・AO入試群の2群に分けて処理した。大学志望動機の項目は吉田他（1999）およびベネッセ（2009）を参考に8項目を選び、重複回答可で選択してもらった。入学満足度は4月入学時点の気持ちを4件法で尋ねた。

#### 適応感

従来の適応感尺度を用いず、現在の大学生活の外的事象についてそれが自分に合っているかどうかを尋ねる質問紙を新たに作成した。そのため質問紙項目は「・・・は自分に合っていると思う」という形式で統一した、項目内容の選定は、大久保・青柳（2003）、石田（2009）を参考とした。これら質問紙項目より「・・・は自分に合っていると思う」という形式で尋ねるのが適当と思われる10項目を選び、さらに牧野・森（2002）にならない全体的適応感1項目を加え11項目の尺度を構成した。各項目は「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答してもらった。

#### 大学満足感

ベネッセ（2009）による大学生活満足調査で用いられた5項目を参考とした。この5項目に友人関係を加え、「施設・設備（図書館・インターネットなど）」、「進路支援体制（就職支援・ガイダンスなど）」、「教員」、「友人関係」、「授業・教育システム（教育内容やカリキュラム）」、「大学全般」の6項目について尋ねた。回答は「満足している」「やや満足している」「あまり満足していない」「満足していない」の4件法で尋ねた。

#### パーソナリティ

適応感および満足感にはパーソナリティにより影響を受けると考えられる。そこで先行要因としてのパーソナリティの影響を統制するためにBIG5性格検査を用いた。柏木（1999）の因子分析結果より各下位尺度の因子負荷量上位4項目を採用した。20項目の4件法である。

その他、充実感、大学生活不安感、一般健康評価、大学生活の重視項目など調査されたが、これらは今回は分析対象とはしなかった。

## 結果

## 1 新入生の属性

新入生の属性をTable1に示した。男女比はおよそ7:3で女性が多い。入学形態は70人

(57.0%)が一般入試・センター利用入試群で、53人(43.0%)が推薦入試・AO入試群であった。本大学を第一志望として入学した者は61人(49.2%)、他大学志望者は63人(50.8%)で

Table1 対象者(1年生5月調査)の属性

		n = 124	
		人数	%
性別	男性	35	28.2
	女性	89	71.8
入学形態	推薦入試・AO入試	53	43.0
	一般入試・センター利用入試	70	57.0
志望大学	本大学	61	49.2
	他大学	63	50.8
大学選択理由 (複数回答あり)	学問領域に興味がある	96	77.4
	自宅通学できる	33	26.6
	キャンパスの雰囲気	33	26.6
	資格や免許	30	24.2
	難易度が自分に合っている	28	22.6
	入試方式が合っている	22	17.7
	人に勧められて	21	16.9
	卒後の就職を考えて	12	9.7
希望進路	心理職	65	52.4
	一般企業	33	26.6
	自営業	3	2.4
	その他	33	26.6
大学生生活への慣れるまでの期間	2~3週間以内で慣れた	50	40.3
	4月末くらいまで	27	21.8
	5月になってから	20	16.1
	その他	27	21.7
再受験希望理由* (複数回答あり)	他大学志望だった	22	55.0
	通学が大変	17	42.5
	世間の評価	15	37.5
	雰囲気が合わない	10	25.0
	なんとなく面白くない	8	20.0

\* : 再受験希望ありの40人が対象, 上位5項目

あった。

希望進路は、心理職65人(52.4%)ついで一般企業33人(26.6%)の順であった。

大学選択の理由は、学問領域への興味96人(77.4%)、自宅通学可能33人(26.6%)、キャンパスの雰囲気33人(26.6%)、資格や免許30人(24.2%)、大学の難易度28人(22.6%)等が多かった。現時点での将来の進路希望は心理職65人(52.4%)、一般企業33人(26.6%)、であった。

大学生活には50人(40.3%)が2週間から3週間で慣れたと回答し、4月末くらいまでには77人(62.1%)が慣れたとしていた。一方5月時点でまだ慣れていない者は27人(21.7%)であった。

5月の時点で多少なりとも他大学の再受験を考える者は44人(35.5%)であり、その理由としては、もともと他大学志望だった22人(55.0%)、通学が大変17人(42.5%)、世間の評価15

人(37.5%)、雰囲気が合わない10人(25.0%)、なんとなく面白くない8人(20.0%)などであった。

## 2 学年比較

入学初期の適応状態をみるため学年比較を行った。4年生が少なかったため3年生と4年生は合算して処理した。男女ごとに学年3水準で一元配置分散分析を行い、Bonferroni法により多重比較を行った。男女ごとの学年別得点および分散分析結果をTable2に示した。

全体的適応感および全体的満足感には男女とも学年差はなかった。男性では学年差は少なかったが、女性においては多くの項目で学年差が認められ新入は2年生および3年生以上よりも適応感や満足感が高かった。

男性では適応感(大学立地)・適応感(学生支援)、女性では適応感(授業内容)・適応感(学生)・適応感(職員)・適応感(キャンパス)・適応感(設備)・適応感(学生支援)・満足感「施

Table2 男女ごとの学年別適応感および満足感の項目得点比較

	男 性				女 性			
	1年	2年	3年以上	F値	1年	2年	3年以上	F値
適応感(全体的)	2.77	2.69	2.62	0.27	2.91	2.79	2.71	1.36
適応感(専攻)	3.48	3.08	3.04	3.54*	3.42	3.31	3.21	1.92
適応感(授業雰囲気)	2.77	2.97	2.96	0.70	2.91	3.10	2.97	1.49
適応感(授業内容)	2.87	2.90	2.96	0.17	3.17	3.07	2.90	3.38* 3<1
適応感(学生)	2.68	2.49	2.81	0.97	3.00	2.74	2.52	5.73** 3<1
適応感(教員)	2.90	2.74	3.00	0.91	3.08	3.09	2.95	0.92
適応感(職員)	2.74	2.28	2.31	3.12*	2.97	2.67	2.43	12.39** 2,3<1
適応感(大学立地)	3.06	2.23	2.65	4.98** 2<1	2.62	2.28	2.43	2.77
適応感(キャンパス)	2.90	2.97	2.54	2.06	3.10	2.77	2.62	7.34** 2,3<1
適応感(設備)	2.87	2.56	2.42	1.68	3.07	2.82	2.48	9.47** 3<1,2
適応感(学生支援)	2.58	2.28	2.00	3.04 - 3<1	2.92	2.42	2.38	13.73** 2,3<1
満足感「全体的」	2.90	2.72	2.73	0.59	2.92	2.90	2.81	0.42
満足感「施設」	2.77	2.38	2.38	1.75	3.03	2.88	2.62	5.00** 3<1
満足感「進路支援」	2.71	2.33	2.31	2.34	2.88	2.50	2.55	6.07** 2,3<1
満足感「教員」	2.84	2.69	2.69	0.32	3.14	2.88	2.90	3.41*
満足感「友人」	2.94	3.05	3.00	0.15	3.27	3.01	3.14	2.24
満足感「教育」	2.65	2.59	2.46	0.40	3.03	2.70	2.66	6.99** 2,3<1

\*:  $p < .05$

\*\* :  $p < .01$

設」・満足感「進路支援」・満足感「教育」で新入の得点が高かった。

### 3 適応感項目および満足感項目の関連

全体的適応感と全体的満足感の相関は.61 ( $p < .01$ ) と比較的高い相関を示した。

適応感および満足感の各項目も多くが有意の相関を示したので、適応感各項目と満足感各項目が分離できるかどうかみるため因子分析をおこなった。

次に重回帰分析により、全体的適応感を適応感項目で説明した後さらに満足感によってもされるかどうか検討した。同様に全体的満足感も満足感項目だけでなく適応感項目によっても説明されるかどうかみた。

#### 1) 因子分析

全学年データを用いて適応感10項目および満足感5項目の計15項目全体の因子分析を行った。因子抽出は主因子法、回転はプロマックス回転とした。因子分析にあたり特に得点に偏りのある項目はなくまた項目間相関が.7以上を示すような高いものもなかった。

因子の説明可能性およびスクリープロットより因子数は3因子が適当と判断した。結果をTable3に示した。第1因子は8項目よりなり教育設備や学生支援に関連する内容、第2因子は4項目で教育に関連する内容、第3因子は3項目で学生関係に関連する内容、となっている。3因子の $\alpha$ 係数はそれぞれ.82, .78, .71であった。回転前の3因子で全体の56%が説明されていた。

各因子ともそれぞれの内容に関連する満足感と適応感が同時に含まれており、適応感と満足感の分離はできなかった。

Table3 適応感および満足感の全項目因子分析

	因子1	因子2	因子3
適応感 (設備)	.82	-.16	.09
満足感「施設」	.72	-.11	.12
適応感 (学生支援)	.72	.03	-.07
満足感「進路支援」	.62	.15	-.05
適応感 (職員)	.46	.14	.04
満足感「教育」	.45	.20	.04
適応感 (キャンパス)	.40	-.06	.37
適応感 (大学立地)	.37	.03	-.09
適応感 (授業内容)	-.13	.76	.16
適応感 (教員)	.09	.67	.03
満足感「教員」	.33	.62	-.23
適応感 (専攻)	-.07	.57	.14
適応感 (学生)	-.02	-.01	.77
適応感 (授業雰囲気)	-.08	.21	.62
満足感「友人」	.07	.03	.53
R <sup>2</sup> = .56			
因子間相関			
因子1		.52	.47
因子2			.47

#### 2) 重回帰分析

まず、全体的適応感を従属変数とし、階層的に適応感10項目を投入し次に満足感5項目を投入した。変数選択はステップワイズ法を用いた。同様に全体的満足感を従属変数として満足感、適応感の順に変数を投入し重回帰分析を行った。結果をTable4に示す。

全体的適応感を説明するのに有効な変数は適応感4項目と満足感1項目であった。適応感4項目投入後の満足感項目による説明率増加2%と小さいものであった。

全体的満足感を従属変数とした場合、満足感項目4項目で説明率44%であり次に適応感が4項目投入されは説明率は8%上昇した。

以上全体適応感は適応感各項目で説明される傾向にあったが、全体満足感は満足感だけでなく適応感によってもかなり説明される結果となった。

いずれの分析においても適応感 (キャンパス)・適応感 (教員)・満足感「教育」の3項目は投入されており、全体的満足感と全体的適応感が同じような項目で説明される傾向にあった。

4 入学当初の全体的満足感および全体的適応感を説明する要因

1) 重回帰分析

新入5月時点のデータを対象として分析を行った。

全般的満足感

まず、全般的満足感を従属変数とし階層的重回帰分析を行った (Table5)。変数の投入はステップワイズ法を用いた。第1段階は入学以前の先行変数として、性別およびBIG 5 性格検査

Table4 適応感および満足感項目による全体適応感および全体満足の階層的重回帰分析 (ステップワイズ法による)

	適応感 (全体) R <sup>2</sup> = .59		満足感 (全体) R <sup>2</sup> = .52	
	$\beta$	t	$\beta$	t
適応感 (専攻)				
適応感 (授業雰囲気)			.14	3.01 **
適応感 (授業内容)				
適応感 (学生)	.21	4.94 **		
適応感 (教員)	.25	6.04 **	.13	2.86 **
適応感 (職員)			-.11	-2.31 *
適応感 (大学立地)				
適応感 (キャンパス)	.37	8.61 **	.20	4.26 **
適応感 (設備)	.15	3.60 **		
適応感 (学生支援)				
満足感 「施設」			.15	3.10 **
満足感 「進路支援」			.09	1.78
満足感 「教員」				
満足感 「友人」			.16	3.61 **
満足感 「教育」	.15	3.66 **	.28	5.80 **

\* :  $p < .05$

\*\* :  $p < .01$

全体適応感では、はじめに適応感項目を投入し次に満足感項目を投入

全体満足感では、はじめに満足感項目を投入し次に適応感項目を投入

Table5 入学前変数, 入学時変数, 入学後変数による全体的満足感の重回帰分析

モデル		$\beta$	t	$\beta$	t	$\beta$	t
step 1	BIG5 「勤勉性」	.27	3.00 **	.24	2.80 *	.02	0.31
	BIG5 「神経質」	-.26	-2.87 *	-.30	-3.35 **	-.19	-2.98 **
step 2	入学満足感			.22	2.55 *	.12	1.79
	難易度			.19	2.20 *	.13	2.02 *
step 3	満足感 「教育」					.23	3.00 **
	満足感 「施設」					.22	2.93 **
	満足感 「友人」					.27	3.92 **
	満足感 「進路支援」					.22	2.87 *

\* :  $p < .05$

\*\* :  $p < .01$

R<sup>2</sup> = .16

R<sup>2</sup> = .25

R<sup>2</sup> = .63



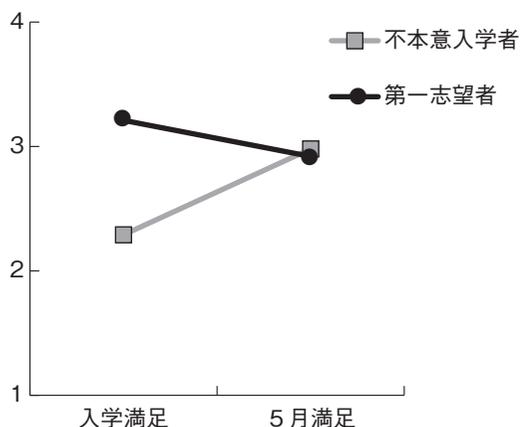


Fig.1 入学後の満足感変化

入学形態の影響についても検討したが、入学形態は不本意入学と強い関係にあったため、入学形態による満足感の変化は上記不本意入学の検討結果とほとんどかわらないものとなった。入学形態2分類で推薦入学者53人中48人(90.6%)は第一志望入学者であり、逆に一般入試入学者66人中では第一志望入学者は5人(9.4%)であった。反復測定分散分析より交互作用( $F = 10.09, p < .01$ )が見られ、推薦入学者の入学満足( $M = 3.10, SD = 0.82$ )は一般入試入学者の入学満足( $M = 2.35, SD = 0.96$ )より高かったが( $F = 19.60, p < .01$ )、5月時点での満足感は推薦入学者( $M = 2.84, SD = 0.80$ )と一般入試入学者( $M = 2.94, SD = 0.66$ )の間に差はなくなっていた。

## 考察

### 適応感と満足感

大学生の適応の測度として何が好ましいが一致した見解は示されていない。これまで大学生の適応研究は適応感や満足感など主観的評価尺度が用いられることが多かった。これらは概念的にもやや混乱しているうえ、パーソナリティなど交絡変数が多いため測度間の相関が高くお互い分離しにくい。

本研究では認知評価としての適応感と自己の感情状態としての満足感を適応の測度とし、両者の関係を検討した。これに対し、個人と環境が適合しているときの認知や感情をまとめて適

応感とする立場がある。このような個人の内面を主体とする適応感尺度では居心地、被信頼・受容感、課題・目的などが因子となっている(大久保, 2005, 磯部・上村, 2007)。つまり適応感を複数の心理的内容から構成されるものとしてとらえている。しかし適応感に多くの認知や判断を含めると概念は曖昧となり、序論で述べたように満足感や充実感などと区別が難しくなる。今回は環境と個人の適合性についての認知評価を適応感と定義したが、もちろん本人が適合していると回答したとしても客観的に適合しているとは限らない。

今回は自分が環境にあっていくかどうかの判断を適応感としたが、大学生活全般への評価である全体的適応感と全体的満足感と.61と中程度の相関を示した。また、因子分析において、

個々の適応感項目と満足感項目は分離されなかった。今回用いた適応感と満足感は従来の尺度を参考に項目を選んだが、従来の適応感尺度や学校生活尺度はいろいろな生活場面に対する評価をするものであるため生活場面を中心に因子構成されている。参考とした項目がもともと領域ごとの因子で構成されるものであったため適応感と満足感よりも領域ごとに項目が分離されたのだと思われる。たとえば友人関係に適応できていれば友人関係に満足感が得られやすいので、因子分析により満足感と適応感ではなく友人関係として因子に分かれたのも当然と考えられる。

因子内容そのものについては、学生支援・設備、教育、学生関係の3因子が今回抽出された。従来の中学生などの適応研究や学生生活研究では、友人、教師、学業が関連要因として重視されており(岡田, 2008)、今回も同様な因子が抽出され妥当なものであったといえる。このような生活場面に焦点をあてた適応研究は個人がどこに問題を抱えているかを明確にするため援助を目的とした場合に有効と考えられている(大久保, 2005)。

一方、重回帰分析の結果は適応感と満足感はやや分離できる結果となった。全体的適応感と全体的満足感各項目ではほぼ説明され、満足感項目による説明力の向上はほとんどなかった。全体的満足感の場合は適応感項目追加で7%ほど説明力

が増加し、やや適応感の影響を受けていた。しかし今回の研究では適応感項目10項目に対し満足感項目5項目であり全体的満足感を説明しようとするには少なすぎた可能性がある。

今回は分析対象とはしなかったが、充実感についても本研究では測定している。仲野・壺井(2008)は満足感と充実感は異なるとしている。満足感は充実感の規定要因であって学生の自我同一性の形成には満足感よりも充実感が関連しているとし、充実感をより重視している。しかしこれまで充実感、満足感、適応感の関連はまだ十分検討されておらず今後の課題である。

今日のように進学率が上昇し大学進学が一般的になると、大学への動機付けも多様になってくる。どのような意識や態度が大学生として好ましいか判断は難しく、周囲からみると好ましくなくとも本人は満足していたり適応感を感じていたりすることもありうる。なるべく概念的に区別できその後の大学生活に対して予測的妥当性がある指標により今後大学生の適応を評価していくことが望ましいと考える。

### 入学後の適応感と満足感

本研究では入学初期の学生の適応状況および関連要因の検討がおもな目的であった。

大学生活に慣れていない新入初期は2年生以上よりも大学生活への適応感や満足感が低いと予想していたが、特にそのようなことはなかった。むしろ適応感や満足感の個別項目のいくつかは入学初期の方が良好であった。丹羽(2005)も大学生活の不安感研究より入学初期が特に問題とは言えないとしており、理由として入学初期は入学への期待感があるためとしている。市丸(2001)も新入生の方が4年生などよりストレス感が低かったとしている。入学初期の適応感や満足感がどのように変化していくかは今後縦断的研究により検討する必要がある。

関連する要因の検討では、重回帰分析より入学初期の全体的満足感や全体的適応感は入学以前の先行変数であるパーソナリティや入学関連変数の影響を受けていることが示された。自己の感情状態である満足感の方が、認知評価である適応感よりもパーソナリティの影響を受けて

おり、特に入学満足の影響が大きいようであった。また説明変数として選択されると予想していた不本意入学つまり他大学志望は変数投入されなかった。Fig.1に示されているとおり不本意入学は入学不満足感と強く結びついており、また不本意入学は2値変数であるのに対し入学満足は4件法であることなどにより、不本意入学よりも入学満足感の方が変数として選択されたものと思われる。したがって、不本意入学は入学満足感を介してやはり入学直後の適応感や満足感に関係していると推測される。

しかし、多くの場合この不本意入学が入学後学生生活の適応感や満足感に重大な影響を与え続けることはないようである。入学時の不本意入学者も5月時点ではだいたい満足しているという評点になり、不本意入学者と第一志望入学者の満足感に有意差はなくなっている。学生相談など臨床事例的には確かに不本意入学を理由に退学していく学生が認められるが、多くの不本意入学者は入学後に大学生活に満足感を得て適応していくのだと思われる。浜島(2003)も大学入学後の意識変化を調べ第一志望でない学生も肯定的変化をすることが多いとしている。

このような入学後の肯定的変化をもたらす要因として、今回の重回帰分析の結果では友人関係や教育への満足感や大学の雰囲気への適応感などが関連していた。牧野・森(2002)は、授業満足度や大学の物理環境、さらに友人関係も含めた大学付加価値への満足度が大学生の総合満足感に大きく影響していたと報告している。浜島(2003)によれば、大学入学後に大学満足感が高くなる大学とそうでない大学があり、その要因として教育環境や対人関係などがあげられるという。本研究の結果もこれらに符合するように思われる。

入学初期の大学への満足感は、入学後の学習意欲や充実感に影響し(伊藤, 1995)、また卒業時の満足感へも関連している(植村, 2001)。大学としては、学内の雰囲気や入学早期の教育環境あるいは学生間の対人関係へのサポートなどを考慮していくことが求められていると考えられる。

今回の調査の問題点として、対象数が少なくまた大学・学部による偏りがあり結果の一般化

が困難という点がある。その一方、本来適応感や満足感は大学ごとの差が大きいものであり、一般化しすぎるとかえって調査の有益性が低くなる可能性がある。今後さらに調査対象を増やしどのような変数が大学生活を評価するのに重要であるか検討する必要がある。そのためには縦断的研究も行わなければならない。大学への不満足感や不適応感を感じている学生が、大学にどのようなことを要望しているのか調べることも必要である。

また、適応感および満足感の測定項目もさらに検討が必要である。適応感と満足感の関連を検討する上ではなるべく対象領域をそろえ、項目数も多くするべきであったと考えられる。

本調査では新入生調査を5月に行ったが調査時期は入学直後の4月をはじめに行う方が明確な結果が得られたかもしれない。今回いつ頃大学生活に慣れてきたかを尋ねているが、73人(60.8%)は4月中には大学生活に慣れたと回答しており、まだ慣れていない4月初めに調査する方が入学初期の適応感を把握してきた可能性がある。しかし一方で入学直後ではまだ授業や友人関係など大学生活の評価することが難しい。4月中には多くの新入生が大学生活に自然に慣れていくため5月以降の時点でも不適応感や不満足感を感じている者への対応が学生支援上は重要と思われる。そのような意味では5月調査が好ましい。

今後の縦断的調査により学年進行に伴い適応感や満足感がどのように変化するかを検討する予定である。さらに適応感や満足感が、大学への出席や履修状況など客観的指標とも関係するかみていく必要もある。

## 【文献】

安藤延男(1971). 大学生の不適応 教育心理学年報 10, 94-103.  
ベネッセ教育開発センター(2009). 大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセコーポレーション.  
海老原嗣生(2009). 学歴の耐えられない軽さ 朝日新聞出版  
藤井義久(1998). 大学生活不安尺度の作成および

信頼性・妥当性の検証 心理学研究 68: 441-448.  
浜島幸司(2003). 大学生活満足度 武内清編 キャンパスライフの今 玉川大学出版 73-90.  
広沢俊宗(2007). 大学新入生の適応に関する研究(1): 学習面での適応—不適応に関わる諸変数の検討 関西国際大学研究紀要 8, 121-138.  
市丸訓子(2001). 看護大学生のストレス度とストレスラー・ストレス反応・影響因子との関係 4年間の縦断的研究 東京保健科学学会誌 4, 77-82.  
磯部有希・上村佳世子(2007). 大学への進学動機と学校適応感との関連 文京学院大学人間学部研究紀要 9, 51-61.  
石田靖彦(2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性、妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性—他方法相関行列からの検討— 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 12, 287-292.  
石本雄真(2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 3, 93-99.  
伊藤美奈子(1995). 本意就学類型化の試みとその特徴についての検討 青年心理学研究 7, 30-41.  
笠原嘉・山田和夫編(1981). キャンパスの症候群 弘文堂.  
柏木繁男(1999). 性格特性5因子論(FFM)による東大式エゴグラム(TFG)の評価 心理学研究, 69, 468-477.  
牧野幸志・森裕紀子(2002). 大学生活への満足度に関する教育心理学的研究—学生は大学に満足しているのか?— 高松大学紀要, 37, 59-72.  
仲野好重・壺井康仁(2008). 学生生活の満足感とアイデンティティ形成の間をつなぐもの—充実感からのアプローチ— 大手前大学論集 9, 227-252.  
諸井克英(1986). 大学生新入生の生活自体変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究 25, 115-125.  
丹羽智美(2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究 13, 156-169.  
岡田有司(2005). 学校適応研究における諸問題—理論と研究方法の側面から— 中央大学大学院研究年報 34, 213-229.  
岡田有司(2008). 学校生活の下位領域に対する意

識と中学校への心理的適応 順応することと享受することの違い パーソナリティ研究 16, 388-395.

大久保智生・青柳肇(2003) 大学生用適応感尺度の作成の試み 個人—環境の適合性の視点からパーソナリティ研究 12, 38-39.

大久保智生(2005). 青年の適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—教育心理学研究 53, 307-319.

植村善太郎・小川一美・吉田俊和(2001). 大学生の適応過程に関する縦断的研究(2) 大学生の学習への取り組み, および大学生生活満足感に関連する要因の検討 名古屋大学大学院教育 発達科学研究科紀要. 心理発達科学 48, 29-43.

山田ゆかり(2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要 6:9-36.

谷島弘二(2005). 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究(文教大学人間科学部) 27, 19-27.

吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎(1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究(1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 46, 75-98.

## Factors related to psychological adjustment and satisfaction in freshmen of the psychology department

Masami Shoji

Mejiro University, Faculty of Human and Social Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2011 vol.7

### **【Abstract】**

The purpose of this study is to examine the factors on adjustment and satisfaction of freshmen of the psychology department. The author evaluated the distinction of adjustment and satisfaction of collage life, and the factors affecting them. The participants were 322 undergraduate students (male 96, female 226). Factor analysis was not able to distinguished adjustment items and satisfaction items. Regression analysis showed the ambiguity of students' evaluation to total adjustment and to total satisfaction. Controlling big five personality, regression analysis indicated that some variables related to admission, adjustment items and satisfaction items explained total adjustment and total satisfaction. The important factors related total adjustment and total satisfaction were class content, university environment, and friendship between students. Freshmen showed high score of adjustment and satisfaction items, and it was suggested that the expectation to collage life of freshmen affected them. We discussed the problems of measurement of adjustment and satisfaction, need for longitudinal studies, and assessment of related factors.

**keywords** : collage freshman, psychological adjustment, satisfaction, unwilling admission